

『竹取物語』

平安時代の物語。一卷。成立時期・作者ともに未詳であるが、およそ10世紀前半に、男性知識人によってつくられたと考えられている。『源氏物語』『絵合』の巻には「物語の出で来はじめのおやなる竹取の翁」とあり、当時すでに初期の仮名物語の代表作とみなされていた。

内容は構成上、かぐや姫の生い立ち、5人の貴公子と帝の求婚、かぐや姫の昇天の三部からなる。竹取の翁が竹の中から小さい女の子をみつけてたいせつに養育していくうち、わずかの間に美しい女性に成長したのでかぐや姫と名づける。姫のうわさを聞いて多くの男たちが求婚したが、なかでも石作皇子(いしづりのみこ)、車持皇子(くらもちのみこ)、右大臣阿部御主人(あべのみうし)、大納言大伴御行(だいなごんおおとものみゆき)、中納言石上麻呂(いそのかみのまろ)の5人は熱心であった。そこで姫はこの5人の貴公子に対してそれぞれ、仏の御石の鉢、蓬萊(ほうらい)の玉の枝、火鼠の裘(かわぎぬ)、竜の首の珠、燕(つばくらめ)の子安貝を持ってくるように難題を課す。5人は姫の要求にこたえようと苦心をするが、結局すべて失敗に終わる。最後に帝が姫を求めて勅使を遣わすが、姫はそのお召しにも応じず、養い親の翁や姫の嘆きをあとに、不死の薬と手紙を残して、八月十五夜、天人に迎えられて月の世界へ昇天してしまう。

物語の枠組みには、天人女房譚、求婚難題説話、地名起源説話など多くの伝承説話の型を用い、現実的な貴族の求婚や帝の求愛物語を主軸として、自在な想像力により、整然たる虚構の世界を構築しており、空想と現実とが巧みに調和され統一された傑作となっている。文章は簡潔で力強く、処々に漢籍・仏典を援用し、知的な言語遊戯を楽しみ、滑稽風刺をきかせつつ、貴族社会への批判意識をうかがわせる一方、人物の性格や心理、人間的苦悩にまで筆が及んでおり、素朴ななかにも現実性を失わずしてなお浪漫的な香気高い作品となっている。

本学所蔵の『竹取物語』は大型奈良絵本。寛文(1661-1672)ごろの書写か。表紙は、金泥の下絵を施してある紺表紙。上冊は朝顔の模様、中冊は竹の模様、下冊は水草の模様。その表紙の左上に、金泥下絵料紙の上に題簽「竹とり物語上(中・下)」を墨書。

奈良絵本は、室町末期から江戸前期にかけて制作された絵入りの古写本のことである。その内容は室町期の小説である御伽草子、あるいは物語や謡曲などを主として、そこに奈良絵と呼ばれる挿絵を加えた冊子本である。この奈良絵本は、従来、奈良の大寺院に属する絵仏師たちが、注文に応じて制作したものと言われてきたが、実際には京都在住の絵師も加わっていたらしく、詳細は不明である。初期の段階では大型縦本と横本が多く、その後は中型縦本が多く作られた。このような奈良絵本は、伝統的な絵巻物を基盤として成立したとみられる。本館所蔵のこの奈良絵本は、大型の形態や二面にわたる画面など、初期奈良絵本の特徴を備えている。

[参考文献]

成蹊大学図書館所蔵稀書解説目録：成蹊大学図書館，2006.9 026/Se17 2013300481
“竹取物語”，日本大百科全書(ニッポニカ)，JapanKnowledge，<http://japanknowledge.com>，(参照 2014-10-25)

竹取物語①

かぐや姫に「龍の頸の珠」を持って来るように言われた大納言大伴御行は、探しに行かせた家来の帰りが待ちきれず、自ら船で探索する。

「わたしの弓の力からすれば、龍がいたら、きっと射殺して、頸の玉を取ってしまえるだろう。」と海に漕ぎ出すが、どうしたことか、疾風が吹きだし、あたり一面暗くなって、浪は船にうちかかり、雷は落ちかかるようにひらめきかかる。龍を殺そうとしたことが間違っていたと泣きながら神様に千度ほども呼びかけると、その効果があったのだろうか、やっとのことで雷が鳴りやんだ。大納言は播磨の明石の海岸にどうにかたどり着くが、病にかかり両目は李のようになり、世間の人々が「大伴の大納言は、龍の首の玉を取っていらっしゃったのか」「いや、御眼に李のような玉をつけていらっしゃったよ」というと「ああ、その李はたべがたい」といったことから、世間の道理にあわぬことを「あな、堪へがた」といいはじめたのである。

[参考文献]

竹取物語 日本古典文学全集8 / 片桐洋一校注・訳: 小学館, 1972.12
918/25/8 0093102286 p. 75-82より要約